

ゲーテ・シラー往復書簡集の文体論的特性 (三)

新 井 皓 士

一 主題の継統⁽¹⁾

前稿において我々は一七九四年から一七九七年のテキスト・データに基づき、以下の諸点を確認した。

(i) 文章長はほぼ対数正規分布に従う。

(ii) 文章長の分析は、作者判別には必ずしも有効ではない。また、その効果は分析の方法によってかなり異なる。たとえば、ゲーテとシラーの文章長頻度分布について一様性仮説をたて、カイ二乗検定を行っても、帰無仮説は棄却されない。一方、両者の文章長平均についての、 t 検定や分散分析は有意となる。すなわち、対象がある程度似通った分布を示すと、頻度分布によるカイ二乗一様性検定の検出力は効力を失い、むしろ平均値に関

する t 検定や分散分析の方が有効に機能する。後者の場合、その分析過程を通じて観測される同一作者における文章長のゆれから、その精神環境や人生局面の反映をみることも可能である。

(iii) 不変化詞の判別分析への応用可能性。出現頻度の高い不変化詞二十のうち、ゲーテ、シラーそれぞれに特徴的な四語 (aber auch man und) を選び、一七九四年から九六年のデータに基づく線形判別式を作成し判別分析を行った。その結果、内部データ (二四標本群) については判別は完璧だったが、外部データ (九七年) については十三標本中二個の誤判別が生じた。

(iv) 同じく不変化詞二十を用いて主成分分析を試みたところ、九四年と九七年のゲーテ、シラーそれぞれ四

個の年次別標本群、九六年、九七年の年度内分割小標本群のいずれに属しても、第一、第二主成分得点による布置図においてゲート標本群とシラー標本群の間に線引きをすることが可能であった。⁽³⁾

今回は上のデータに更に一七九八年度のデータを加え、五年間を通して分析することにした。この五年間は直線距離にして約二十キロほど離れたワイマールとイエーナに居住するゲートとシラーが、平均するとほとんど週一往復のペースで書簡を交わし、あるいは互いの芸術観を吐露し、あるいは作品推敲上の意見を交換し、あるいは友人知己の消息、フランス大革命後の変動極まりない欧州情勢のこと、その他四方山の情報を伝え合った時代である。視点を書簡と両者の間柄だけにしほれば、二人が接近する直接のきっかけとなったシラー主宰の月刊誌『ホーレン』は、九五年一月より始まって九八年六月に遅れ馳せの前年分最終号が刊行されて終結、ゲートが管轄するワイマール劇場は九八年夏に大改修されてシラーの『ヴァレンシュタイン』初演をこけら落としとする。そしてシラーは翌九九年十二月三日に遂にイエーナを去

ってワイマールに移住している。すなわち、この五年間は大学町と公国首府の間を使い托された両者の手紙が行き来する文字通り往復書簡の時代だったのである。⁽⁴⁾ 話題や思想の共通性、資質や境遇の対照性などが、この往復書簡の文体にどのように反映し、それはどのような手法を通じて文体統計論的分析が可能か、テキストをあえて数量データ化し、多変量解析などを応用して文体の差異を効果的に明示することがどの程度可能か、それがこの実験的・探索的研究の目的であり、さしあたり対象を五年間で区切って中仕切りとする所以である。

二 時系列でみる文章長分布

ここでいう文の長さの測定原理や語の定義、そして底本のことなどは前稿でも述べたので繰り返さないことにする。表一は、一七九四年より一七九八年にわたるゲート・シラーの往復書簡を各年度毎に更に小分割し、機械的に番号をふって、文章の長さについてそれぞれの平均等を整理したものである。ただし最後の一行(トータル)は元のデータすべてを合併した統合標本の平均や標準偏差を示しており、分割標本の平均を平均したもので

(3) ゲーテ・シラー往復書簡集の文体論的特性 (三)

表1 文章長データ

ゲーテ	文数	平均(対数標準偏差)	シラー	文数	平均(対数標準偏差)
G1794	157	2.919	S1794	305	3.068
G95-1	150	2.586	S95-1	150	2.885
G95-2	149	2.699	S95-2	151	2.753
G95-3	150	2.745	S95-3	149	2.745
G95-4	113	2.799	S95-4	151	2.636
G96-1	98	2.910	S95-5	149	2.685
G96-2	87	2.913	S95-6	69	2.633
G96-3	66	3.146	S96-1	123	2.600
G96-4	134	2.824	S96-2	138	2.650
G96-5	102	2.838	S96-3	312	3.100
G96-6	84	3.202	S96-4	91	2.871
G97-1	101	3.128	S96-5	142	2.700
G97-2	131	3.042	S96-6	136	2.969
G97-3	114	3.043	S97-1	121	2.832
G97-4	147	3.265	S97-2	172	2.928
G97-5	173	3.083	S97-3	219	3.038
G97-6	142	2.998	S97-4	121	3.014
G97-7	120	3.030	S97-5	129	2.966
G98-1	180	3.026	S97-6	208	2.916
G98-2	163	3.155	S98-1	166	3.043
G98-3	124	3.009	S98-2	144	3.018
G98-4	130	3.001	S98-3	110	2.920
G98-5	137	2.832	S98-4	112	2.869
G98-6	74	2.820	S98-5	90	2.903
G98-7	207	2.917	S98-6	123	2.836
total	3233	2.953	S98-7	306	2.802
		0.659	total	4087	2.885
					0.673

図1

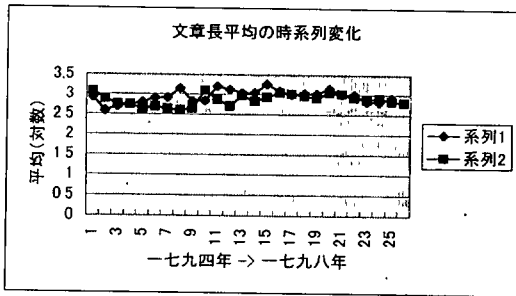


表2 文章長の分散分析

1794-1798 ゲーテ書簡文(25標本群)				1794-1798 シラー書簡文(26標本群)					
変動要因	平方和	自由度	不偏分散	分散比	変動要因	平方和	自由度	不偏分散	分散比
群間	85.889	24	3.579	8.246	群間	91.472	25	3.659	8.077
群内	1317.185	3207	0.434		群内	1758.215	4060	0.453	
全体	1403.074	3232			全体	1849.687	4086		

* 1794-1798 ゲーテ・シラー書簡文合併(51標本群)

変動要因	平方和	自由度	不偏分散	分散比
群間	185.719	50	3.714	8.780
群内	3075.400	7269	0.423	
全体	3261.119	7319		

図2-1 統合標本のヒストグラムと記述統計量(ゲータ 1794-1798)

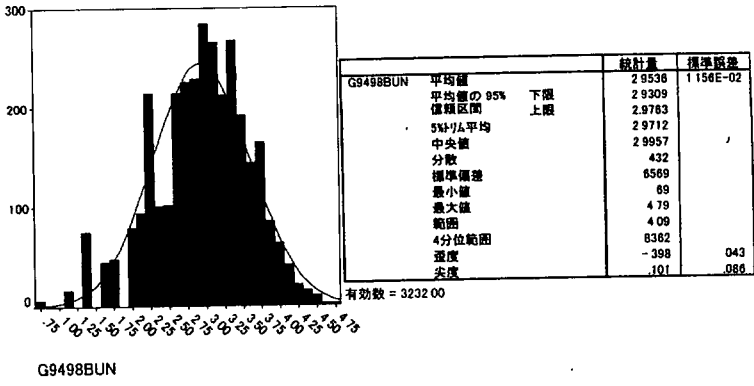
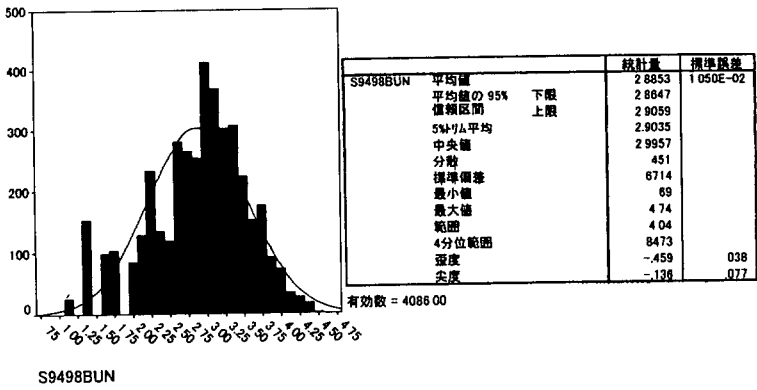


図2-2 統合標本のヒストグラムと記述統計量(シラー 1794-1798)



はない。これは分割標本と全体の比較および後に述べる分散分析の為に必要でもあった。表一の下にある折れ線グラフは、上表にある平均値を時系列的に図示したものであり、系列一がゲーテ、系列二がシラーである。ただし、両者のデータは時期的に必ずしも同一とは限らないので、本来は別々のグラフにすべきであるが、スペースの節約もあって同一画面に表示してみた。とはいえ、七年の後半あたりから二つの線がほとんど重なっており、またゲーテの方が概ね高い位置で推移していることも明らかであろう。図二・一は同じく合併したゲーテの統合標本によるヒストグラムと記述統計量であり、図二・二はシラーのそれである。中央値が共に九五%信頼区間からわずかに外れていることは、はずれ値、すなわち極度に長い文が存在することを示している。箱ひげ図ではそれが一層鮮明に示されるが、ここでは省略した。

ニュース記事などの文章長にはあまり変動がなく平均がほぼ一定していることは前稿でもふれたが、書簡文では期間を長くとるにつれ、平均に変化がみられるようだ。表二にその一部を示した分散分析にそれがあらわれている。下段のゲーテ・シラー合併標本群の分散比(F値)

が大きいのとは当然としても、ゲーテ、シラーのいずれも五年間をとおしてみると、平均にかなり変化があり、分散比は意外に大きく、文章長の平均は等しいとする仮説は棄却される。同一年度内のデータを分割した標本群を用いた分散分析でも棄却されることが多いが、分散比はこれほど大きくならないようである。考えてみれば書簡では一定のテーマ意外に随時様々な話題や用件が挿入されるから、文章の長さにもそれが如実に反映してもおかしくないのだが、特にゲーテの場合、口述筆記が主であるゆえ、おのずと文の長さも安定する、と予断を抱いていたように思う。どの時期にとくに変化があるか、分割標本すべてについて多重比較をすることも考えられるが、表一やグラフからもある程度明らかであり、今回は断念した。なお、ゲーテ、シラーとも年次毎にまとめて五つの標本群を作り、分散分析を行うと、分散比は更に大きくなり、特にゲーテの場合にそれが著しい。

ニュース文のみならず、ゲーテの短編物語『ノヴェレ』のように、分散分析をおこなっても平均値が等しいとする仮説が棄却されない散文作品もあるところからすると、様式的意識が平均化の方向に働くケースもあるよ

図3-1

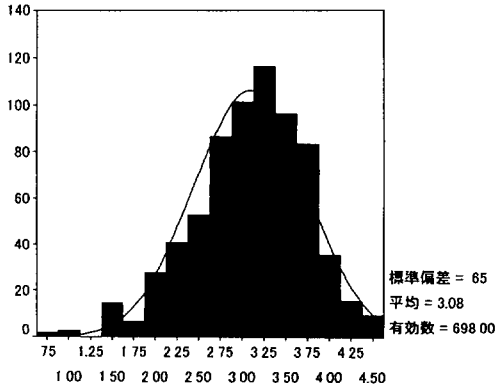


図3-2

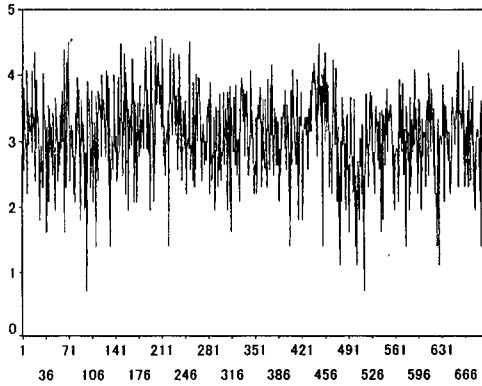
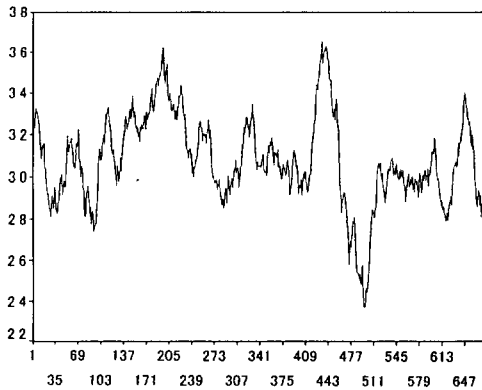


図3-3



(7) ゲーテ・シラー往復書簡集の文体論的特性(三)

図4-1

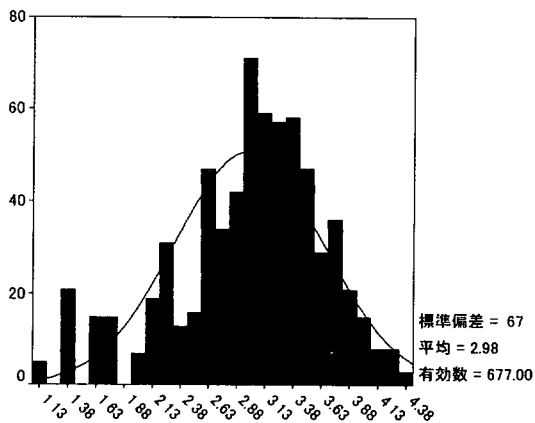


図4-2

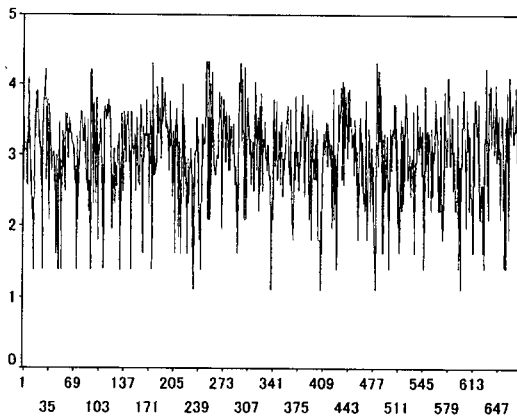
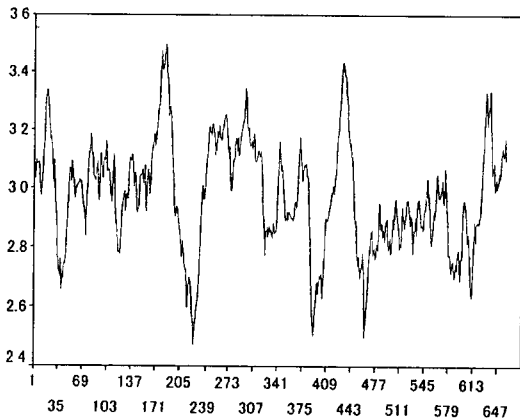


図4-3



(9) ゲーテ・シラー往復書簡集の文体論的特性 (三)

主成分分析
布置図 (標本)

図5 Goethe/Schiller 年次ファイル (1794-1798)

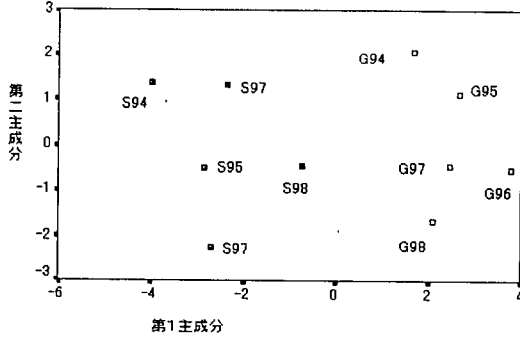


図6 Goethe/Schiller 分割ファイル (25+26)

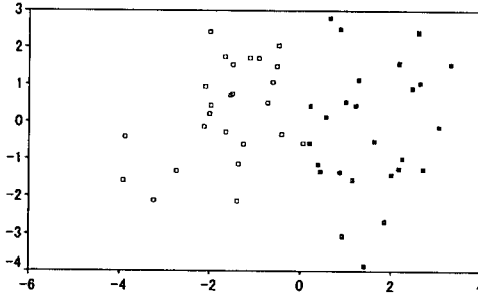


表4 各標本の主成分得点

標本	第一主成分	第二主成分	標本	第一主成分	第二主成分
G1794	-0.718	0.499	S1794	2.607	0.171
G95-1	-1.997	0.199	S95-1	2.650	1.026
G95-2	0.062	-0.596	S95-2	2.471	0.877
G95-3	-3.860	-0.415	S95-3	1.633	-0.537
G95-4	-1.634	-0.291	S95-4	1.853	-2.695
G96-1	-0.413	-0.355	S95-5	2.710	-1.291
G96-2	-3.242	-2.126	S95-6	2.249	-1.001
G96-3	-2.094	0.928	S96-1	1.401	-3.870
G96-4	-1.969	0.422	S96-2	1.585	-0.616
G96-5	-3.901	-1.586	S96-3	2.179	1.546
G96-6	-0.602	1.719	S96-4	0.863	-1.371
G97-1	-1.248	-0.618	S96-5	0.923	-3.085
G97-2	-0.903	1.691	S96-6	3.058	-0.147
G97-3	-1.384	-2.145	S97-1	0.392	-1.172
G97-4	-1.490	0.730	S97-2	1.218	0.428
G97-5	-1.649	1.734	S97-3	1.238	0.521
G97-6	-1.476	1.518	S97-4	3.320	1.539
G97-7	-1.099	1.693	S97-5	0.204	-0.594
G98-1	-0.507	1.476	S97-6	1.290	1.109
G98-2	-0.477	2.032	S98-1	0.654	2.775
G98-3	-2.742	-1.339	S98-2	0.877	2.474
G98-4	-1.983	2.400	S98-3	2.174	-1.281
G98-5	-1.531	0.694	S98-4	2.010	-1.445
G98-6	-1.359	-1.157	S98-5	0.225	0.407
G98-7	-2.125	-0.149	S98-6	0.439	-1.358
			S98-7	0.561	0.120

うなので、今後なお検討する必要がある。一七九七年後半に限ってみると、ゲーテに関して八月頃の文章が目立って長く、そのため半年分の五標本で分散分析を行うとF検定で棄却となるが、同時期のシラーでは棄却とはならないこと、これが恐らく未だ内縁の妻クリスティアーネと息子アウグストを初めて伴って故郷フランクフルトに旅し母と四年ぶりの(そして最後の)会見をするゲーテの心境をある程度反映しているのではないか、という憶測を述べたが、同じデータを使って今回は時系列的表示を試みてみた。

図三・一が一七九七年後半におけるゲーテ書簡文の長さ(対数)をヒストグラムであらわしたもので、図四・一は同時期のシラー書簡文を同様にグラフにしたもの、両者をくらべると、どちらかといえばゲーテの方が正規分布に近いすっきりした形であるといえよう。図三・二は個々の文章長を書かれた順に時系列で表示したものであり、図三・三は同じデータの二十項移動平均をとってグラフにしたものである。シラーについても同様に、図四・二が元のデータ、四・三が二十項移動平均である。移動平均の折れ線の動きだけみると、一見シラーの方が

変動が激しいようにもみえるが、目盛りの幅が少し違うので、実際はゲーテ方の、横軸目盛り二百番前後が高い山の塊をなしている。また帯状をなす元のデータのグラフでは、一番濃い部分がシラー方ではほぼ安定推移しているのに対し、ゲーテ方では上下に波打つ感がある。このような視覚的印象は分散分析の結果とも照応するように思われる。九四年から九八年まで平均値の全データを同様に表示してみることも念頭にかんだが、項目数が多すぎて簡単にはいかないので今回はあえて試みなかった。⁽⁷⁾

三 不変化詞データに基づく主成分分析の応用

表三は、文章長の場合と同じく五年分の分割標本(ゲーテ二五標本、シラー二六標本)に基づく不変化詞⁽⁸⁾二十語の頻度分布表であり、頻度は千語当りの出現頻度(千分率)に換算してある。これとは別に比較のため年次毎に集計した頻度分布表も用意した。意図するところは、主成分得点による布置図を描いて、各標本および変数の位置関係を視覚的にとらえるところにある。その手順は、まず不変化詞二十を多変量とみなして、相関係数行列

(11) ゲーテ・シラー往復書簡集の文体論的特性 (三)

図7 Goethe/Schiller 年次ファイル (1794-1798)

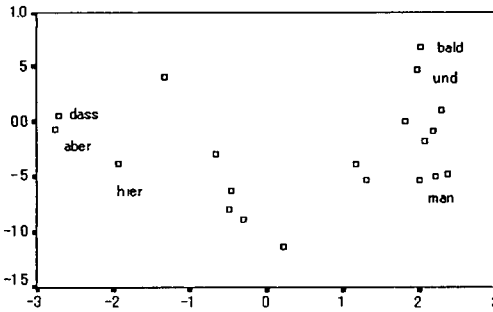


図8 Goethe/Schiller 分割ファイル (1794-1798)

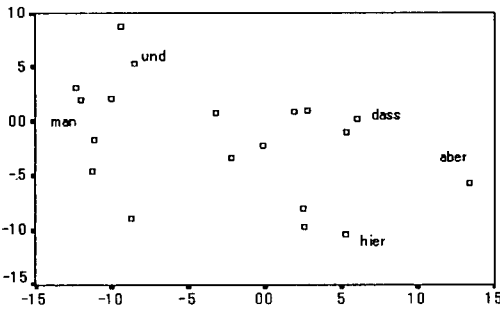


表5 (図8のデータ)

aber	1.340	-0.052	nicht	0.533	-0.109
als	0.288	0.093	noch	0.249	-0.810
auch	0.260	-0.976	nun	-1.189	0.196
bald	-1.103	-0.170	nur	-0.650	0.433
da	-0.004	-0.226	recht	-0.871	-0.9
dass	0.606	0.021	schon	-0.310	0.073
denn	-0.997	0.208	so	0.199	0.083
doch	-1.118	-0.462	und	-0.846	0.533
hier	0.526	-1.041	wenn	-0.217	-0.399
nun	-1.225	0.312	wohl	-0.929	-0.876

(標本データを標準化した2スコアの共分散行列) を作成し、その固有値 (Eigenvalues) と固有ベクトル (Eigenvectors) を算出する。次に、2スコア行列と固有ベクトルとの積を順次求め、これを各標本の主成分得点とする。その結果得られた布置図が、図五 (ゲーテ、

シラーそれぞれ五個の年次データ標本による布置図)、および図六 (ゲーテ二五、シラー二六の分割データ標本による布置図) である。年次標本の布置図では、ゲーテ (正) とシラー (負) が截然とわかれてグループをなすのに対し、五一個の分割標本の布置図では、両者の領域

がかなり接近しており、G九五・二とS九七・五などはほとんど並び合っているから、通常の分析ならグループをなすとみなされるだろう。しかし、この両者の間に線引きをすれば、左側(負の領域)にゲートの分割標本群、右側(正の領域)にシラーの分割標本群がある。これは第一、第二主成分による布置図であるが、これに対応する固有値の累積寄与率は三〇%程度であって、それにもかかわらず、このように弁別可能な結果を得られたことが重要であろう。この主成分の解釈はむずかしいが、あえて言えば不変化詞の使い方にゲートとシラーの文体氣質が微妙にあらわれると言えようか。たとえば、「しかし」の意味合いで、シラーは *aber* を多用し、ゲートは *doch* にそのニュアンスを託す、というように。いずれにせよ、そもそも不変化詞を分析手段に用いるのは、形態論上の簡明さばかりでなく、無意識に使用しがちな語という前提があるゆえ、その現れ方もまた常に明快とはいえない。図六には個々の標本を表示できないので、表四として、主成分得点表を掲げた。⁽⁹⁾

図七と図八は、変数の相関行列と固有ベクトルの積から得られた各変数の得点を図示したもので、図七は年

次標本、図八は分割標本に基づいている。各変数名を图中にすべて挿入するのは難しいので、図八について各変数の得点を表五として付加した。図七と図八は一見すると全く異なるようにみえるが、実際は一八〇度回転するとかなり似通った配置になる。変数 *da* と *schon* の位置だけが両図で多少異なる程度であり、図八でいえば、ゲートの使用頻度の高い語が横軸の負の方(左側)に、シラーの使用頻度の高い語が正の領域に(右側)集まっている。シラー方の最右翼は *aber*、ゲート方の最左翼には *nun* と *man* が近接している。

四 判別分析

主成分分析布置図(図六)では、分割標本G九五・二とS九七・五が近接し、他にもG九六・一やS九七・一、S九八・五、S九八・六、S九八・七のように、GS境界線付近にあって、仮に外部的判断基準がないとすれば一グループを形成するとしてもおかしくないのがみられる。作者不明文献の探索などではこれではなお心もとないゆえ、種々のクラスター分析などを適用して比較することも考えられるが、⁽¹⁰⁾ここではゲート書簡、シラー書

簡という判断基準があるので、線形判別関数による判別を行い、主成分分析の結果を補う、すなわち相補的效果の可能性をさぐる試みが続ける。

前稿では一七九四年から九六年までの分割標本を基に、四変数 (aber, auch, man, und) の線形判別関数を作成し、九七年の分割標本十三個に当てはめたところ、二つの誤判別を生じた。これを新たな九八年分の分割標本十四個にあてはめると、更に三つの誤判別が加わった。判別式を作成する際に使用した標本を内部標本、それ以外を外部標本とすると、後者の場合、内部標本二個はすべて正しく判別したが、外部標本二七個については五個の誤判別を生じたことになる。この判別率が高いか低いか微妙なところであるが、シェークスピアの『ヘンリー六世』三部作の帰属を判定すべく試作した判別式⁽¹⁾にくらべると、やや精度が落ちるようにも思われる。もともと変数の数は大幅に削減しているが。

判別関数の作成⁽²⁾に当っては変数の選択と使用する標本 (内部標本) が結果を左右する。今回は試みにまず十個の年次標本をもとにし、主成分分析で第一主成分得点が大きく、かつ第一、第二主成分得点の符号が一致する四

語 (aber, bald, hier, und) を取上げてみた。結果は内部標本はむろん正しく判別するが、いわば半内部標本ともいえる分割標本五一個について八個の誤判別を生じた。これでは前回作成の判別式より精度が落ちる。

次に、ほぼ同じ原理で、分割標本五一個をもとに五語 (bald, da, so, wohl, und) を変数として判別式を作り、試したところ年次標本十個こそ正しく判別できたが、内部標本自身に六個の誤判別を生じた。これでは使い物にならない。いま「ほぼ」同じ原理と述べたのは五語のうち一語 (und) だけは第一、第二主成分得点の符号が異なるが、なにしろ頻度が高い語なのであって付加えたもので、今度はこれを外し再度四変数の判別式を作ってみたが、結果は更に悪いものであった。その理由はこれらの語の頻度が相対的に低いことにある。

主成分分析を参照して変数を選んだ結果が芳しくないので、次は単純に五年分の統合標本においてゲーテ、シラーの平均値の差が大きなもの五個 (aber, auch, man, nicht, und) を変数に選び分割標本五一個をもとに判別式を作成したところ、やはり年次標本は正しく判別するものの、分割標本五一個のうち四個の誤判別を生ずる。結

局前回作成した判別関数と大差ない、というより、こちらの判別は内部標本のみということになるから、変数が一つ増えた割には精度はよくなっていない、といえるかもしれない。

そこで思い切って前回同様、一七九四年から九六年までの分割標本二四個をもとにして判別式を作ることにし、但し変数を九個に増やしてみることにした。選択原理は総平均の差が一以上のものという単純なもので、前回の四個 (aber, auch, man, und) に対して、五個 (hier, nicht, nun, nur, recht) が加わった。次式が得られた判別式である。

$$\begin{aligned} Z = & -0.867(\text{aber}) - 0.725(\text{auch}) - 0.679(\text{hier}) \\ & + 1.051(\text{man}) + 0.065(\text{nicht}) + 0.876(\text{nun}) \\ & - 0.204(\text{nur}) + 1.792(\text{recht}) + 0.513(\text{und}) \\ & - 1.9645 \end{aligned}$$

これにそれぞれのデータを当てはめて判別得点を計算してみると、年次標本や内部標本はすべて正しく判別されるが、外部標本としての九七、八年の分割標本二七個のうち四つの誤判別が生じた。つまり変数が五個増えた割りに、誤判別率は二七分の五から二七分の四に減ったに

すぎない。これだけを見れば判別分析は徒労に類するともいえない。しかしながら、注目すべきことに今回試みた判別分析

の試みにおいて、主成分分析では境界に接していたG九五・二は上記いずれの判別でもゲート方に判定された。G九六・一、G九六・六、G一七九四も同様である。これに対してシラー方で境界に近い標本は判別式により判定に変動がある。このことは主成分分析の布置図において境界域に位置する標本のうち、何種かの判別関数による判別得点が一貫して一定の判別結果をえたものは、ほぼ間違えなく帰属を決することができることを示唆する。逆に判別式一本で断定するのは危険であるといえよう。その意味で作者判別問題における主成分分析と判別分析の相補的機能が、文体分析の対象としては相当厄介なゲート・シラー往復書簡の分析を通じてある程度立証されたということができよう。

五 中仕切り

ゲートはその八二年余りの生涯に、残されているものだけでも一万四千通以上の手紙を書き二万通以上を受け

取ったといふ⁽¹³⁾。そのうちシラーとの交信は双方約五百通前後、そのほとんどがゲーテ自身の手によって整理され刊行された。我々が分析したのは数にすればその半分にも満たない。しかしこの五年間は二個の稀有な精神にとつて最も刺激に富む充実した交友の歲月であった。望まれて勤めた十余年の公務を突如放擲し二年近くのイタリア旅行から帰還したゲーテがワイマールでまず出遭ったのが人生の伴侶クリスティアーネであり、フランス革命の余波が渦巻く中で再び現世実務にとらわれかけたゲーテの精神的飢餓を癒し創造の世界に誘ったのはシラーとの出会いといふ「幸運な出来事⁽¹⁴⁾」であった。

ゲーテはシラーを通じてカント哲学に一定の理解を育み、『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』を完成し、再び『ファウスト』に取り組む精神的活力を得た。一方シラーは宿痾や経済的不遇と闘いながらゲーテの協力を得て、『ホーレン』『美神年鑑(ムーゼン・アルマナハ)』を充実させ、美学哲学論文を彫琢し、『ヴァレンシュタイン』三部作の完成と舞台上演に情熱を傾けた。二人の合作『クセニエン』やバラードの競作もこの五年間の遺産である。ありふれた言い方をあえて踏襲すれば、時は

まさにドイツ古典主義文学の黄金時代であった。

目を転ずれば、フランス革命は一七九一年のミラボーの死以来、混沌と先鋭化の度合いを強めて、一七九四年四月にダントンが処刑されると思えば、七月末(テルミドール九日)にはロベスピエールも断頭台の露と消え、エジプト、イタリアで実力をたくわえたナポレオンは一七九九年十一月(ブリュメール十八日)に遂に独裁の礎を築く。ゲーテが一七九七年に三度目のイタリア旅行の計画を断念するのはかかる国際情勢の爲であり、その代わりにゴットルト峠を目指したスイス旅行で、ゲーテはヴィルヘルム・テルの歴史伝説を知り、病弱の爲ほとんど自宅を離れられないシラーにこれを具に伝える。そこからやがて自由独立を希求するシラー最後の戯曲『ヴィルヘルム・テル』⁽¹⁵⁾が生まれるのも、二人の間に互いの天分に対する敬意と信頼があったればのことであろう。ちなみに『群盗』の作者シラー(Le seigneur Gilius)に対してパリの立憲議会は一七九二年八月二六日に、十七名の諸外国人と共に「フランス公民権」を一方的に授与したが、その証書(das französische Bürger Diplom)は遅れ遅れて一七九八年三月一日にシラーの手に着い

たことも、翌日付けのゲーテ宛て書簡から明らかになる。一方、ゲーテは一八〇八年十月二日、エアフルトでナポレオンに謁見するが、「あなたは人間だ」という有名なことばのあと、何度も読み返したという『若きウェルテルの悩み』に談は及び存外的確な質問などがあったと伝えられている。革命時代、皇帝時代の違いはあれ、ともに築いたワイマール古典時代ではなく、過去のものとみなした疾風怒濤時代の作品が二人の代表作として隣国にも知られていたことに、時代にもはやされつつ孤高の存在であったものの歴史的皮肉を感じる。その意味ではこの往復書簡は知己を見出した喜びが充溢する記録であり、力量あい接する者の創造的格闘の喜びの記録でもあろう。二世紀を経て、かかる精神の記録を単なる数量に置き換え分析の対象としたことに罪なからんことを祈りつつ、ひとまず方法的検証の中仕切りとする。

- (1) 『一橋論叢』第二二二巻第三号、頁一〜一六。
 (2) データ数が多い場合、あるいは分布が互いかなり異なる場合、文章長のカイ二乗一様性検定の結果が有意となり、判別に役立つ場合もある。たとえば『キリストに倣いて』の文章長分布と著者候補と目されるケンピスとジェル

ソンの文章長分布について、ユールのデータに基づいて一様性検定を行うと、ケンピスは帰無仮説保留、ジェルソンは仮説棄却となる。これは「ユールの特性値」を根拠に彼が下した結論に等しい。

- (3) 『一橋論叢』第二二二巻第三号の三六四(一四)頁にある図三、およびその下の主成分得点表は、通常の主成分得点とは異なる値となっている。これはSPSSの因子分析プロシージャーによる成分行列に千分率データを乗じた値で、この成分行列は通常の方法、すなわち相関係数行列の第一固有値に対応する第一固有ベクトルにマイナス・二・八二九五四五を乗じ、第二ベクトルにマイナス・二七八を乗じたものであった。

これに対して通常の手順、すなわち千分率データを基準化したZスコア行列と、相関行列より得られる固有ベクトルの積による各群の布置図では、y軸をはさんでシラーがプラス側、ゲーテがマイナス側に分かれた形をとる。また、この(通常の)布置図と、Zスコアと因子得点の積に基づく布置図は、丁度百八〇度回転した形となった。

- (4) 両者の文通は、一七九四年六月に始まり、シラーの没年(一八〇五年五月九日)まで続くが、分量的にはその七〇%強が一七九八年末までに属する。二つの町の間には定期的郵便馬車および特定の配達婦(Botenfrau)による往来があったらしい。

- (5) ゲーテは小なりといえどもワイマール公国の台閣に列する枢密顧問官、十歳年少のシラーはイエーナ大学教授で、

その社会的地位や経済的差異は明らかである。しかし、當時の文芸・思想界の風潮に抗して共同で風刺詩集成『クセニエン』を発表し、ジャンル論研究からパラードを競作し、ゲーテの小説『ヴァルンヘルム・マイスターの修行時代』、シラーの戯曲『ヴァレンシュタイン』の完成にあたっては、互いに助言を求め忌憚なく意見を交わして、いわゆるドイツ古典主義思想の結晶化に努める。その一方、二人の天賦の才、氣質の違いについては、ほかならぬシラー自身による分析が『ホーレン』掲載の論文『素朴文学と有情文学』となって世に問われたといえよう。

(6) ゲーテを恋愛の高手だ、などと様々な恋愛体験を喋喋する俗説に筆者は組するわけではない。むしろヴァイマル宮廷社会の中枢にありながら、一七八八年七月十一日の出会い以来、市民身分の(すなわち貴族社会からは暗に排斥される負い目をもつ)娘クリスティアーネと生活を営み続けた一種独自の世界観と持続する意志に人間的興味を覚える。ゲーテが教会の祝福を受けてクリスティアーネと当時として正式の結婚をするのは、フランス軍がヴァイマルに進駐し、あわやの危機にクリスティアーネが敢然と立ち向かったという一八〇六年十月のことである。(cf. Parth, W. W.: *Goethes Christiane*, Muenchen 1980)

(7) 移動平均の計算等はいつものようにAWKを用い、結果の図示にはSPSSを利用した。移動平均を使うヒントは、鈴木義一郎『情報量基準による統計解析入門』(東京一九九五)から得たが、文章長を時系列グラフにし、一般

に文学研究に応用する試みはまだほとんど例がないように思われる。これは本来、小説(特に短編小説)などの分析に応用すれば、時に面白い観察が可能であろう。筆者は偶然カフカの『変身』に適用してみても、その応用可能性に気づいた。

(8) 二十語の中には厳密にいえは不変化詞ではない不定人称代名詞manも含まれている。もっともmanは北ドイツの口語では不変化詞としても出現するが。(若崎英二郎編、ドイツ語副詞辞典、東京、一九九八)

(9) 行列の計算はMathematicaで行い、図はSPSSで描いたものをウィンドウズ付属のペイントにコピーして修正した。また表三はエクセルで印刷したものである。一貫性のないこと甚だしいが、要するになるべく使い慣れたものですませ、猫の目のように交わる新機能・新操作習得の時間と時間を最小限にとどめたい人生斜陽族の窮余の策である。

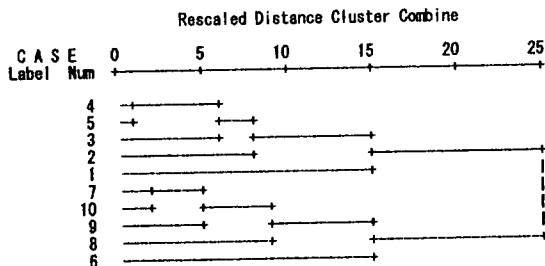
(10) 今回はクラスター分析に本格的に取り組んだわけではないが、SPSSの機能を利用して、群平均法によって dendrogramを作成してみたところ、G九五・二、G九六・一、S九七・五が、特異なポジションを占めている。年次標本については、ゲーテ五標本とシラー五標本がきれいにわかれて樹状図を形成した(図八)。

(11) 『一橋論叢』第一一九巻第三号、頁一一一九。

(12) 手順は省略する。ここでもAWKとMathematicaをまっばら用いた。

図8 群平均法による樹状図(ユークリッド距離)

Dendrogram using Average Linkage (Between Groups)



不変化詞 20
 年次ファイル
 1-5 Goethe
 6-10 Schiller

(13) Witte/Buck/Dahnke/Otto/Schmidt (Hg.): Goethe Handbuch in vier Bänden, III. (Stuttgart/Weimar 1997, S. 430 ff)

(14) このことをゲーテはシラー没後十二年を経て、『シラーとの最初の知遇』において回顧し、当初シラーを回避していたこと、精神的対極にあるとみなしていたこと、イエーナの自然科学協会の夕べで偶然出遭い、植物の変態について論議するうち、思わぬ共感をえたことなどを語っている。この回想はのちに少し筆を加えて『幸運な出来事』と改題された。

(15) 初演は一八〇四年三月、ヴァイマル宮廷劇場。

(一橋大学大学院言語社会研究科教授)